

総 説

高橋慈本と悲眼院 —救療から児童養護へ—

Budhist, Jihon Takahashi and 'Higenin'

— From relief work of medical treatment for eye disease to child nursing —

坂本 忠次

要約：本研究ノートは、岡山県笠岡市で真言宗の僧侶、明王院住職の高橋慈本が、明治末の戊申詔書などを契機として同市の走出に開設した医療救済事業の悲眼院について、残されたいくつかの資料をもとに検討したものである。同院は、甘露育児院の医師を務めた渡邊元一と慈本との出会いに始まり、1914年（大正3）眼科の無料診療として渡邊氏を院長に高橋慈本が専務理事、他の真言宗僧侶の協力を得て始められた。慈本は本山の役員や済世顧問など社会活動も活発で、昭和恐慌期など経営の困難もあったが、官公署の補助金や有志からの寄附、信者の喜捨も得て、事業はほぼ順調に続けられた。眼科のほかに巡回産婆、内科、児童保護へと進み、戦後は児童養護事業として再興、今日まで継続していることは驚嘆に値する。

Key Words：救療事業、真言宗僧侶、眼科無料診療、巡回産婆、児童養護

はじめに

近代日本の民間社会事業史についてはキリスト者をはじめ仏教者についてのいくつかの事例がある。筆者は前稿で岡山県笠岡市の民間社会事業である津田明導の甘露育児院の孤児救済事業について取り上げてきた⁽¹⁾。これを岡山県関係に例をとってみると、前稿でも述べたがこれまで守屋茂の岡山県社会事業史研究が知られた⁽²⁾。また、社会事業史学会ではキリスト者の石井十次ほかの岡山孤児院の研究を何人かが手がけてきているが、仏教者の社会事業については、これまで研究は少なく本稿では笠岡市のいま一人の仏教者の社会事業である真言宗の僧侶である高橋慈本の悲眼院の救療事業について検討して行くこととする。この事業は、当初の救療事業（最初は無料眼科診療）にはじまり戦後の児童養護事業へと続いているものだが、この点について残された資料を踏まえて解明を行っておくことにしたい。なお、悲眼院の事業については、高橋慈本氏の次男に当たられる高橋真一氏（朝日新聞記者、故人、高橋昌文住職の伯父）により執筆された『麦の一穂を—高橋慈本の歩いた道—』（非

売品、1977年）のほか『悲眼院十年史』など残された資料は限られており、分析にもかなりの限界があったことをあらかじめお断りしておきたい。ここでは上記の資料をもとにした筆者なりの素描と当時の時代背景をもとにした若干の検討に止まることをお断りしておきたい⁽³⁾。

I. 高橋慈本の生い立ちと主な経歴

まず、高橋慈本の経歴について述べておくことから始めたい⁽⁴⁾。慈本は、1879（明治12）年広島県芦品郡常金丸村の高橋金右衛門を父として生誕、1886（明治19）年地元簡易小学校に入学したが、1889（明治22）年福山市草戸明王院で龍池密雄師に会い入寺の発心、同年12月川上郡成羽村の実相坊に入った。その後高野山中学林に入学、1897（明治30）年卒業後岡山に帰る。1899（明治32）年後月郡井原町（現井原市）の常楽寺の住職となった。常楽寺から上京、横浜大同学校に学ぶ。東京では横浜文学同志会の組織をはじめとし短歌同人「浅香社」同人など文学活動をして1902（明治35）年井原常楽寺に帰寺。しかし、勉学の希望止みがたく1904（明治37）年同住職を辞職して岡山に出てキリスト教岡山教会でキリスト教を研究（大原家の奨学金を得たといわれる）、柿原政一郎とキリスト教青年会機関誌「操山文学」を編集

2008年12月5日受付／2009年1月21日受理
Chuji SAKAMOTO
関西福祉大学 社会福祉学部

し発行した。石井十次や大原孫三郎からの影響もあった。中等教員養成準備教育所では国漢を担当した。

その後、大阪時事新聞社にも入社するが間もなく退社し、1909（明治42）年9月僧侶生活にかえり小田郡北川村走出の明王院の副住職となる。翌年2月権中僧都、北川村青年団長など社会教育活動を行った。この頃、笠岡町の医師渡辺元一と知り合い、施療病院の創設を相談した。渡辺医師は当時の笠岡市の津田白印による甘露育児院の孤児救済事業を助けた経験のある人である。1912（大正元）年9月明王院住職を拝命、12月妻豊野と結婚した。豊野は津田白印に絵を学び、白印の弟子でもあった。

1914（大正3）年1月3日救療事業悲眼院を創設、専務理事となる。翌年、明王院を開放して「子供会」を創設、その後目の治療から、巡回助産婦、内科治療、児童保護事業へと発展した。1918（大正7）年岡山県済世顧問の嘱託を受け、翌年禁酒団体「己未会」を組織し禁酒運動を行う。1920（大正9）年高野山大師教会本部監事に就任し高野山へ登山したが、翌年辞して帰寺。1924（大正13）年7月真言宗備中支所学頭、10月小田郡済世会を結成し理事長に推された。この年、岡山県方委員銓衡会委員となる。1925（大正14）年には、社会事業功労者として岡山県知事から表彰を受けている。救療事業などが社会的にも評価されたことが分かる。

仏教関係では、1926（大正15）年古義真言宗会議員に当選、備中支所長を辞任して関西における聖道門連盟（真言、天台、禪宗などの連盟）を発起人として組織、六大新報社に事務所を置く。古義真言宗宗教団体「大成会」を発会し、総務に選ばれた。1927（昭和2）年古義真言宗財務部長、学務部長など引き受けるが内局辞任のため帰寺。1928（昭和3）年、御大礼に際し社会事業功労者として内務大臣より表彰され、銀盃を受けた。翌年には、古義真言宗管長からも社会事業功労者として表彰されている。権中僧正に補せられる。また、古義真言宗制度調査会委員も引き受け、翌年には、金剛峯寺耆宿に任命され、福岡県下への布教も行っている。

1931（昭和5）年香川県下にも布教、この年古義真言宗釈法伝内局成立、庶務部長に就任し高野山へ登る。1933（昭和8）年大阪松竹少女歌劇団の争議を調停している。1934（昭和9）年管長代理として北支那、満州国（当時の呼称）を訪問、北支要人、満州溥儀執政に会う。弘法大師御遠忌大法会文書部長に任命。釈内局総辞職したが再留任。この年、全日本方面委員聯名から社会事業功労章を受ける。1935（昭和10）年九州各地を布教

した。持宝院兼務住職として晋山式挙行。内局総辞職して高野山より下山。1936（昭和11）年岡山県下仏教徒済世連盟会創立、理事に推される。北海道・樺太布教。大正天皇太后より方面委員功労者して硯管下賜さる。1937（昭和12）年明王院、持宝院の宗祖千百年御遠忌法要修業。全国方面委員会委員に、昭和14年全国社会事業協会評議員に就任した。

1938（昭和13）年岡山県方面委員銓衡委員に任命、高野山金剛峯寺耆宿。

1939（昭和14）年悲眼院創設25周年。2月中央社会事業協会評議員就任。閑院宮殿下より悲眼院創設25周年に当たり、功により賞状と金一封下賜さる。この年、岡山県会議員選挙に立候補するが次点。1940（昭和15）年5月、全日本社会事業聯盟会長より表彰される。藍綬褒章を下賜。11月大政翼賛会岡山県支部参与、12月岡山県仏教会支部長に推される。1941（昭和16）年岡山県仏教会を結成、副会長に推薦される。戦時に入り北川村翼賛会支部理事に推される。明王院道場で伝法灌頂修業、岡山県青少年団顧問、日本方面委員聯盟評議員をつとめる。仏教会では、県仏教会主催大迫悼会修業、真言宗宗会議員となる。1942（昭和17）年大日本婦人会小田郡支部顧問、日本私設社会事業聯盟代議員、大日本仏教会協議員を委嘱さる。1943（昭和18）年日本仏教教会協議員として、日泰文化協定成立。1944（昭和19）年岡山県厚生委員銓衡会委員となる。1945（昭和20）年大日本戦時報国会岡山支部副支部長に任命さる。同時に岡山県仏教会会長に任命。同年5月23日遷化された。（高僧がこの世からあの世に移ることで死亡を意味する言葉）笠井岡山県知事の碑文がある。

戦後1950（昭和25）年9月、悲眼院は救療事業の歴史を閉じ、新たに虚弱児施設を開設し、1998（平成10）年児童福祉法の改正により児童養護施設となった。1954（昭和29）年定員50名。2008（平成20）年9月1日現在2歳から18歳までの子どもを保護し、就学前児童14名、小学生19名、中学生26名、高校生11名の計70名を預かり保護している⁽⁵⁾。明王院の現住職高橋昌文氏は、1974（昭和49）年滋本の長男の弘基（昭和18年～49年）のあとをつぎ慈本からは3代目、この寺は1163年弘法大師の教えをもとに創立、慈本が32代目、昌文が34代目に当たる由緒ある寺である。

II. 悲眼院創立の背景と開院

（1）創立の背景

先に見てきたとおり、悲眼院は1914（大正3）年1月3日救療事業悲眼院として創設された。その誕生の動機と背景についていまだ詳しくみておきたい⁽⁶⁾。ただ上記にもみたとおり資料は限られていることをあらかじめお断りしておきたい。

その出発点は、高橋滋本が、小田郡北川村（現笠岡市走出）の明王院の副住職になったばかりの頃、笠岡の医師渡辺元一と出会ったことに始まっている。渡辺元一は、当時笠岡の医師会の会長をしていたが、1907（明治40）年頃から他界するまで写経をした信仰に厚い人であった。1861（慶応3）年小田郡に桃の苗を移入し名産地にまで育て上げた渡辺家に生まれる。第3高等学校医学部（現岡山大学医学部の前身）を卒業後、笠岡町（現笠岡市）で開業。1900（明治33）年津田白印（本名明導）が笠岡町富岡の本林寺で甘露育児院を開設した時、院の医療面を担当したことが社会事業に関係を持った最初であった。自宅で日曜日の午後に限って特別に施療もしていたという。この時渡辺医師の耳に入ったのが「走出薬師」の現状であった。

1910（明治43）年の春、渡辺元一は、ある会合で高橋慈本と出会う。この時、渡辺は、次のように高橋に提案した。「信仰と相まって救療事業をやったらどうだろうか。…それには位置が大きな要素を占めると思うが、幸い浄瑠璃山は眼の走出薬師として一般に親しまれているので、誠に格好な場所だと思うが…」⁽⁷⁾というのであった。1912（明治45）年笠岡在住の盲人のため五ノ日会を開き、慰安と修養の場とした。慈本は、大きな共感を覚え、寺に帰り本堂に正座し、「これは…本尊さまが私にやってみろ、励まし与えて下さった聖業である」と自覚し、直ちに師の桑本真定老師に相談するとともに、構想の実現に向けて動き出した。

まず、師事していた後月郡県主村（現井原市門田町）金剛福寺の釈大空師—彼を大坂から明王院に帰した恩師—を訪ね相談した。新山村山口の長福寺長尾円澄師とも相談した。両師とも「一言のもとに賛意を表し、相携へて施療病院の設置を唱応せられる」⁽⁸⁾と記されているとおり、直ちに賛意を示し、この事業への着手の方向が決まった。折しも明治政府は、1911（明治44）年2月11日戊申詔書を頒発し、「救貧孤独の赤子」を救済すべく百万円の御下賜金があり恩賜財団済世会の組織ができた時であった。また、その後1913（大正2）年には笠岡—井原間に軽便鉄道が敷設され経済界も活況を呈していた時でもあった。これらを契機として、甘露育児院などで

孤児救済事業にも経験のあった一医師と、仏陀の人間救済の悲願への信仰に燃えていた慈本という若い仏教者との出会いのもとその恩師たちの賛成によって救療事業への出発がみられたともいえる。

なお、悲眼院の名称の由来は、薬師如来の本誓のうち仏の力により心の眼を開くという意味の言葉である「悲生眼」から名付けられたとされている⁽⁹⁾。

この時期の時代背景をみると、明治後期は、日本資本主義が日清戦争後の八幡製鉄所の建設など官営工場や絹綿二部門といわれる産業の発達により産業革命を行い、同時に明治国家は朝鮮・台湾など植民地進出による帝国主義的な政策へと移行する時期でもあった。特に、日露戦争による資本主義の発展と一方では戦後不況のもとで階級分化が進んだ。都市では労働者階級が大量に出現して労働問題が発生し、農村では慢性的な農業不況のもとで小作農民は生活困難に直面し、それまでの地主・小作関係が悪化し各地で小作争議が頻発し始めた。東北地方では飢饉などもあり農民の生活は困窮を極め、貧困の中で娘や子供の身売りなどする事件も横行していた。

明治政府は、初期の恤救規則（明治7年）に象徴されるとおり、貧民救済にはわずかの公的扶助を与えたのみで救済は人民の情誼に任していたのであった。例えば、後に述べるとおり児童養護施設（児童福祉）においても同様で帝国の首都東京市など一部の地域を除き殆どが民間の慈善事業に任せるのが実情であった。そういう中で、岡山県下では、先にもみた石井十次の岡山孤児院事業（明治22年）への着手をはじめ（慈本は十次の事業を支援した大原孫三郎とも親交がありまたキリスト教の動向にも精通していた）、同じ笠岡町でも浄土真宗派の僧侶津田明導による甘露育児院の孤児救済事業（明治33年～）など民間の宗教者による社会事業も行われていたことも間接的には事業着手への動機となったと思われる。

明治末期の農村不況と疲弊する世相のもとで内務省は、先に述べた戊申詔書を契機に地方改良運動を推奨した。このような明治末期の社会情勢も反映していたといふべきか、真言宗関係の仏教者の間でも渡辺医師の提案を受けて明王院の高橋慈本、走出薬師関係者などが中心となって施療施設の設立への動きとなってあらわれていくのである。1911（明治44）年7月の悲眼院設立趣意書を見ると、次のように記している⁽¹⁰⁾。

悲眼院設立趣意書

抑仏陀大悲の発する所済世利民ならざるはなし、されば吾宗祖弘法大師は寝ねたる間も国利民福忘れ給はず施業に

教育に文学に土木に事として為さざるはなく、以て吾等末徒に垂示し給える其靈驗炳（へい）として今尚日星の如し翻って方今の世局を察するに日に月に宗教と社会事業と相分離し、高祖の慈心と違背するものあり、為に道義の頹廢甚だしきを致し終に社会の欠陥を招くに至れり、爰を以て本年二月十一日紀元節の佳辰（かしん）に際し、鳳聲（ほうせい）煥發して窮貧無告（むこく）の弱者に施療す可しとの慈勅を拝聞するに至れり。嗚呼吾等国民たるもの豈（あに）眷々（けんけん）として御配慮のある所を服膺（ふくよう）せずして可ならんや。吾等茲に鑑みる所あり、其の昔一演僧正本願薬師如来の靈驗に感して開創し給へる走出薬師の靈地をト（ぼく）し、悲眼院を建設せんと欲す。

今や醫術の進歩は駸々（しんしん）として底止する所を知らず遺憾なしと雖、只其の方薬の手術にのみ依らんよりは大悲佛陀の靈驗を仰き、以って心身二種の治療を為さんには如かじ。斯の如く信仰治療法に依る効果の多大なるは現下斯界に実験上の定説をはなれり。されば衆病悉除（しつじょ）の本誓たる薬師如来の加被力を仰き宗教的信仰治療と進歩せる醫術と相俟って不幸なる眼疾の病者を救療せんと欲す。是れ吾等今回の素顔にして一は以て陛下の大御心に酬ひ奉り、一は以て吾宗祖大師の本誓に副ひ奉らんとの微哀（びちゅう）なり。冀（ねがわ）くは大方の諸賢仁士吾等の大願を達せしめ給へと云爾（しかいふ）。

明治四十四年七月

発起者一同

（2）院の発起と開院運動

上記にみられる発起人一同つまり発願主というのは次の人である。

小田郡北川村走出持宝院・丸山祥幢

小田郡北川村甲弩来迎院・桑本真定

小田郡新山村山口長福寺・長尾圓澄

後月郡県主村門田金剛福寺・釋大空

小田郡北川村走出明王院・高橋慈本

小田郡笠岡町小田郡医師会長・渡邊元一

開院運動は、地方の識者の賛成を得て着々と進行し、1913（大正2）年明王院にて第1回発起者会を開き、名称を「悲眼院」とし、1. 走出薬師の大師堂を診療兼薬局とすること、1. 開院費は発起者にて仮支出すること、1. 院長及び理事者は無報酬のこと、1. 庵及持宝院、明王院の離れ座敷を臨時病室に充当すること、1. 院の方針は更に発起者において熟議決定のこと、などを決議し、着々と開院の準備が進められた。

同年12月第2回発起者会を開き、次の「院是」を決議したのであった。それは、

1. 治療は医術と信仰の併進を基調とすること。

1. 経営上如何なる困難に遭遇するも不浄の寄付行為をなさず、浄財の寄付金のみ受くること。

1. 患者よりは人格尊重の意味に於いて任意の喜捨金は受くるも其他如何なる名義たりとも徴収せざること。

1. 関係者は病院によって生活せざること。

1. 渡邊元一氏を院長とし高橋慈本を代表とし以って経営上の全責任をもたしむること。

以上5項目で、みられるとおり医術と信仰の併進、浄財の寄付金のみ受けること、患者からは料金を徴収しない（喜捨金は受ける）、など仏教の信仰倫理に徹した運営方針であった⁽¹¹⁾。

III 開院と事業の展開状況

このようにして、1914（大正3）年1月3日、午前10時より開院式を挙行した。小田郡、後月郡内の寺院住職、行政関係者など各界からの20余名の参列を得て、持宝院住職丸山祥幢師の式辞、来賓山本笠岡署長、三浦北川村長、釋法傳僧正の祝辞、釋大空師の答辞などがあり、持宝院客殿にて祝宴など意義深い中身であった。出席者を含め多額の浄財の喜捨があった。井原町薬店千村才太郎（その後故人）は開院に必要な薬品全部を寄贈されている。開院と同時に決まった役員は次のとおりであった⁽¹²⁾。

院 長	渡邊元一	専務理事	高橋慈本
理 事	釋 大空	理 事	長尾圓澄
監 事	丸山祥幢	監 事	桑本真定
看護婦	唐井松代	板村八重子	

「院是」のとおり、医師渡邊元一氏が院長、高橋慈本師は専務理事を引き受けられた。役員のうち創立にも貢献された丸山祥幢、桑本真定の両師は早く遷化（他界）している。

院長渡邊元一は、当時小田郡医師会会長、済世顧問（大正6年）や夜間診療、職業相談所、人事相談所などを開き、自費で書記を雇い貧困者の救済活動をし、10年間理事長をつとめたが、1924（大正13）年他界した。その後を長尾圓澄師が理事長が引き継いだ。悲眼院の前庭に県知事笠井信一の碑文による顕彰碑が建てられている。

なお、悲眼院規定は次のとおりである。

悲眼院規定

第1条 本院ヲ悲願院ト称シ岡山県小田郡北川村走出持宝

院内ニ設置ス

- 第2条 本院ハ日新ノ医術ト本尊薬師如来トノ加被力ニテ
心身ノ疾患ヲ治療救済スルヲ以テ主義トス
- 第3条 本院ハ薬師如来ノ誓願ニ縋リ参詣スル人ニ当分ノ
内眼科ノミヲ救療スルモノトス
- 第4条 本院ハ一切ノ患者ヨリ一定ノ手術料及薬価ハ徴収
セスト雖モ患者ノ人格ヲ尊重シ任意ノ浄財ヲ喜捨
セシムルモノトス
- 第5条 本院ハ社会事業ノ一種トシテ済世ノ意ヨリ設立セ
シモノナレバ常ニ患者ノ精神向上ヲ期スルガ為ニ
月二回以上ノ定時講演ヲナス
(中略)
- 第10条 本院ハ一般患者ノ浄財喜捨物ト有志寄附トニ依テ
維持経営スルモノトス

みられるとおり、医術と薬師如来の信仰力の両面からの治療である、薬師如来の誓願に縋り参詣する人に限り当分の間眼科のみを救療する、手術料・薬価は徴収しない（浄財喜捨物と寄附は受ける）、定時講演を行う、などを規定していた。

ほかに、「通院患者心得」があった。その第1条 本院ニ来リ受診投薬ヲ乞ハントスル者ハ其地方ノ寺院又は本院ヨリ授与ノ診察券ヲ持参スルコト とあるとおり、寺院からの紹介又は本院発行の診察券が必要であり、信仰と医療との併進が認められる。

信仰と医術の併進については、信仰を患者の任意にすべきか、理事者の指導によるかが問題となった。信仰を患者の任意とし放任すると、迷信を助長する心配もあるとし、適当な指導をすることとし、隔日に患者を一堂に集めて加持をなし、月3回以上法話をなすこととした。又、院長が治療しながら感話を行うとか、薬を仏前に供えてのち患者に拝受させたりした。

○眼科 1914（大正3）年1月3日開設

諸科を置くと、医師と経費の問題が生じ、本尊薬師は眼病治療にありという理由で、当分の間眼科のみで開始することに決めた。患者は日を追って増加し、中には遠方より参詣して薬のみを求める人、一度きりの人もいた。これらの人を救済するのに施薬の必要も生じ、一錠定価五銭の薬師めぐすりを製造して施薬の方途を講じた。施薬は1カ年1千本以上を出し好成績であったが、売薬組合との関係、納税との関係が煩雑となり、4カ年継続して計5千5百本の施薬をなし、1916（大正5）年12月をもって休止した⁽¹³⁾。

○巡回治療 1917（大正6）年より

救療事業を農村で行うためには、巡回産婆、巡回看護婦制度などの実施が望まれる。その手始めに小学校児童のトラホーム治療に着手すべしとの意見が出た。それは、来院患者の中の児童にトラホームの人が多くおり小学校を巡回治療する目的で「附設、巡回病院」の計画をなし、大正6年、北川小学校を初めとし小田小学校、新山小学校に及ぼし、1年に2期実施、7年、8年と3カ年にわたって院長自ら出張して治療に努めた。救療人員3カ年通計5,497人に及んだ。しかし、事情により9年度より中止した。

○内科 1920（大正9）年7月1日開始

眼科のみ経営してきたが、眼科は他の病気が原因して眼疾を発した者も多く、また家庭の事情で他の医師につけない人もいた。そこで眼科を内科と併設することが望ましいと考え、内科の開設をなし、両科でもって救療を続けた。これには、谷本 峻氏が手伝いしてくれた。

○巡回産婆 1924（大正13）年11月1日開始

渡邊医師の宿願が同氏在世中に実現しなかったが、谷本院長が就任して万難を排し巡回産婆を開始した。産婆規定を設けて、悲眼院附設として産院を設置し小田郡、後月郡などの貧困な産婦を収容した。産婆の主任は高森朝野であった。巡回、出張助産も行った。

○児童保護事業 年1回健康診断実施

これは、年1回の健康診断を実施するもので、先の産婆規定の中に、児童保護事業をあわせ行うことにしていたが実行できず、1927（昭和3）年旧3月4日花の節句を機会に関係者総動員で第1回を実施した。以後毎年1回実施する予定。

○妊産婦、児童健康相談所

妊産婦が相談に来るのに対応して相談に応ずる。谷本院長が出張講演もしている。

同年1月、北川村出身で朝鮮にて足袋王として成功し釜山港にて市会議員をの要職にあった大山儀一及び令弟大山喆太郎の2人が金1500円を寄附され、これをもとに、小田村の團迫代一郎が設計して18坪2階建て金1300円の予算で新築を計画実施した。これまで完全な病室がなく、一般参詣者が参って使用する庵室と茶堂に使用していた部屋を増築して8坪ばかりの平屋建ての仮病室とをもって入院室に充当していたのであった。しかし、工事には予算の誤算もあり結局金3750円を要した。一時多額の負債を抱えるに至ったが、理事者は総本山金剛峰寺に依頼し金1000下付され、岡山県から500円、小田郡か

ら200円の下付を受けた。また、病室建築の援助者は周辺各地域から有志36名にも及び負債も殆ど解消するに至っている。

創立以来、内務省、小田郡、真言宗法務所、同備中支所などからも引き続き助成金などを下付され、大正4年11月、真言宗各派連合総裁大僧正・密門有範から下記のような「奨励の詞」を貰った。

悲眼院

病苦ニ悩メル貧困者ヲ救療シテ仏陀ノ慈光ニ浴セシムルハ菩薩大悲ノ行業ニシテ悲眼院ガ逐日良好ニ向カイツ、アルハ本職ノ随喜ニ堪エサル所ナリ依テ別紙目録ノ金額ヲ交付シテ其ノ善行ヲ補助ス希クハ今後倍々社会人道ノ為ニ奮励努力センコトヲ望ム

大正四年十一月三日

真言宗各派連合総裁 大僧正 密門 有範

1916（大正5）年2月には、内務大臣・一木喜徳郎より奨励金を、また、1921（大正10）年2月には宮内省より事業奨励のため金百円を下賜されている。

事業には基金が必要である。しかし、その基金をつくることは難しい。理事者が日常の経営に苦しむようでは困るので後援団体としての「慈助会」をつくること、真言宗地方寺院住職と地方有志者の提唱によって1915（大正4）年1月組織された。その金額は、会費契約高 475.000=475.000（内収入=150.000 未収入=325.000）で、役員に、会長釈法傳師、会計に名越要一郎氏、幹事に橋本智師、圓覚津師を選んでいる。

またほかに多数の後援者がいた。もちろん先覚者津田白印の事業と同じように開院以来10年で多くの迫害もあり、そのたびに院長及び理事者は手を取り合って仏陀に

祈ったという。しかし、白印の事業が保護児童の実業にも依存し、また白印自身も絵を売るなどして院の経営を助けたのに比較すると、悲眼院の方では真言宗関係の高野山をはじめ地方仏教者住職の支援があり、また官庁関係や小田郡・後月郡など地方有志の後援、臨時寄付者の存在など後援者にはより恵まれていたかも知れない。これは、高橋慈本師が高野山本部をはじめ各方面で社会的に活動されて幅の広い人間関係を有していたことなどがあるいは幸いしていたのであろう。なお、慈本の妻豊野は絵を白印に学んでおり渡辺院長とあわせ両者は深い縁とつながりもあったといえる。

ちなみに、1927年度現在を例に官公署、本山、支所などからの補助金についてみると、表1の如くなっている。みられるとおり、甘露育児院などに比べて外部からの支援金は相対的に多かったと思われる（表1）。

iii 施療の事業実績

悲眼院の使用建物をみると5棟あり、1. 薬師堂外陣（御加持所兼待合所）、1. 大師堂（中央に弘法大師を安置し向かって右に眼科診療所、左に薬局があった）、1. 静思寮（二階に内科の診療所、応接室、伝染室、階下眼科患者の入院室、台所、炊事場等あり、時に階上応接室を入院室に使用）、1. 参籠堂（予備室に充当、炊事場あり、常に患者を収容）、恵澤寮（産婦入院室、3室あり、別に分娩室、浴場など完備）の5棟を完備していた。

これらは、それぞれ補助金、寄付金などで建てられている。

いま、創立日以来1914（大正3）年1月3日から1927年（昭和3）6月30日までの事業の実績をみてみよう。これは、表2に示す如くなる。

表1 官公庁、本山、支所からの補助金（1927年度）

支援先	補助金額（円）	最初の補助年度
内 務 省	200	1916年（大正5）～
宮 内 省	300	1927年（昭和2）～
岡 山 県	600	1919年（大正8）～
小 田 郡	—	1915年（大正4）～
北 川 村	80	1922年（大正11）～
荏 原 村	50	1923年（大正12）～
小 田 町	70	1926年（昭和元）～
真言宗本山	300	1914年（大正3）～
同備中支所	50	1915年（大正4）～

ほかに

恩賜財団慶福会 2500円 産院施設への助成金（1926年度）

注）岡山県『農村に於ける救療施設』1928年

表2 悲眼院治療成績実績表（1914.1.3～1927.6.30）

項目	眼 科 （日）	内 科 （人）	産 院 （日）	相談所 （日）
治 療 日 数	5,293	2,912	1,338	91
患 者 者 数	14,738	1,396	641	5
同 延 人 員	156,566	13,643	2,877	15
入院新患者	1,766	—	—	—
同 延 人 員	68,411	—	—	—
外来新患者	12,972	—	—	—
同 延 人 員	88,156	—	—	—
手 術 数	678	79	—	—
同 治 数	941	89	—	—
出 産 数	—	—	—	—

注）岡山県『農村に於ける救療施設』1927年による

以上の表にみられる通りである。開院以来この期間に取り扱った新患者総数は、1万6,788人、全延べ人員総数17万3,101人に達した。眼科の病種は10種類も20種類もあり、難病で他の病院で不治とされたものもあったという。妊産婦も開腹手術を行った者もあった。患者年齢は1才より90才に及ぶ者、80才以上の老人患者もいたという。中には5カ年以上失明した73才の老人もいたという。男女の割合では女子が6割と多く男子は総数の4割程度であった。来院患者の範囲も広く、雲洲（島根県）の一畑薬師に参詣し帰途立ち寄って療養する者もあった。しかし、大部分が現岡山県と広島県で2県と備前、備中、備後をはじめ4市16郡に及んでいた。少数だが、大阪、愛媛、大分などの各府県から来院した者もいた。悲眼院は、当時あった身分差別をめぐる問題にも配慮し、患者をすべて「さん」で呼び平等に扱っている。

ところで、悲眼院の年間収支をみておこう。表3にみるとおり1914年度～1928年度の14年間でほぼ黒字で推移し、年々の残高—多少の増減はあるが—をみている。これは、先にみたとおり、慈本の本山をはじめとする真言宗の活動、地域での社会活動、濟世顧問の活動など多面的な活動を反映するものでもあったと思われる。

表3 院の年間収支決算表（1914～1928年度、円）

年 度	歳入年計	支出年計	残 高
1914年（大正3）	933.258	765.921	166.337
1915年（ 〃 4 ）	496.171	596.948	65.560
1916年（ 〃 5 ）	701.345	615.305	151.600
1917年（ 〃 6 ）	823.877	777.165	198.312
1918年（ 〃 7 ）	943.535	853.257	293.590
1919年（ 〃 8 ）	1,370.335	1,187.672	476.253
1920年（ 〃 9 ）	1,544.625	1,788.190	232.688
1921年（ 〃 10 ）	2,101.665	2,306.588	27.765
1922年（ 〃 11 ）	2,662.445	2,147.400	542.810
1923年（ 〃 12 ）	2,833.775	2,715.940	600.645
1924年（ 〃 13 ）	2,992.390	3,074.335	578.700
1925年（ 〃 14 ）	2,578.400	2,367.560	789.540
1926年（ 〃 15 ）	2,424.660	3,008.790	205.410
1927年（昭和2）	3,097.670	2,679.280	623.800
1928年（ 〃 3 ）	3,034.010	3,098.090	559.720
総 計	28,542.161	27,982.441	559.720

注）出典は表1及び『悲眼院十五年史』1929年による。

なお、参考までに1927（昭和3）年時の院の予算表をみると表4とおりである。1カ年の経常費は、1922年以來2,500円から4,000円の間を往来していた。関係官署の補助、有志寄付、患者浄財喜捨などの3種で支出の経常

表4 悲眼院予算表（1927年度）

収入の部		支出の部	
項 目	予算金額	項 目	予算金額
第1款 醗金	23	第1款 俸給	1,600
第2款 補助金	1,420	第2款 薬品	500
内務省	200	第3款 器械及備品	400
岡山県	600	医療器	200
北川村	80	備 品	200
荏原村	70	第4款 修繕費	150
小田町	70	家屋修繕	100
真言宗宗務所	300	器具修繕	50
同備中支所	100	第5款 事務費	350
第3款 浄 財	1,000	印刷費	100
第4款 臨時寄付	600	通信費	40
第5款 雑収入	333.2	油炭費	85
第6款 繰越金	623.8	筆紙墨費	25
合 計	4,000	第6款 事業費	250
		トラホーム宣伝費	50
		産児衣類費	50
		児童保護費	150
		第7款 給与費	350
		第8款 雑 費	250
		第9款 予備費	250
		合 計	4,000

注）出典は表1と同じ。

費（俸給、薬品、器械及備品、修繕費、事務費、事業費、給与費ほか）を賄っている⁽¹⁴⁾。予備費もあり、ひとまず各方面からの支援を得て院の経営では赤字とならずに進んだものと思われる。

なお、1928年の資産状況をみると、基金は1000円以上がみられ、負債200円としても、資産状況はひとまず健全だったと思われる。しかし、後述する通り、高橋慈本の書簡などによれば、その経営はきわめて厳しい局面もあった（表5参照）。

表5 悲眼院の資産状況（1928年度）

項 目	金 額 (円)
基 金	1,198.11
建築物（3棟）	8,320.94
医療器	1,900.00
計 器	700.00
計	12,119.05

ほかに負債 200 円

注）出典は表1と同じ。

むすびにかえて

以上、高橋慈本の開設した悲眼院についてみてきた。高橋慈本という人は、真言宗の明王院の僧侶であるが、実に多彩な経歴の持主であった。入寺後多くの寺での修業経験などがあり、キリスト教の経験と文学活動、記者、真言宗本山高野山での役員経験、地域青年団長の社会活動、済世顧問の嘱託や方面委員の役員としての活動がみられた。その結果、

第1に、創立の背景としては、明治末期の戊申詔書にはじまる内務省の地方改良があり、より直接的には社会事業に経験のあった渡辺医師と知り合ったことが救療事業創設のきっかけとなった。しかも、医療では比較的簡単に行うことのできる眼科の診療からはじめ、その後、巡回産婆、内科、児童保護事業（戦後の虚弱児保護や児童養護事業）へと拡大していった。

第2に、事業の特徴は、無料診療であり診察費は徴収せず、寺に参ってくる人の信仰による喜捨のみ受け入れた。官公署や真言宗本山支所、地方有志の寄附によって事業を行っている。寄附の多さは、慈本の本山での役員や済世顧問など社会活動の大きさに伴う信頼を反映していたものといえるだろう。

第3に、しかし、事業は発展し、また、事業の収支もほぼ安定していたが、当時の仏教者の救療といった慈善事業に伴う医業者をはじめ各方面からの誤解や無理解も一部にあり、事業運営には様々な困難もみられたことはいうまでもない。特に昭和初期の昭和恐慌期の農村不況時には有志からの寄附や喜捨も減り事業もきわめて厳しくなっている⁽¹⁵⁾。しかし、困難に際しても真言宗の本山をはじめ近隣の仏教者の協力もあり、陰の支援を得て事業を持続できたことが注目される。

第4に、地方改良運動期に当たり、政府・地方公共団体からの援助は、他の同種の事業に比較し相対的に大きかったことも注目される。これは、慈本の社会的な信頼度の大きさとともに、この事業が社会的に理解され認知されていたことを示すものであろう。

さいごに、戦後1950（昭和25）年9月、悲眼院は救療事業の歴史を閉じ、新たに虚弱児施設を開設し、1998（平成10）年児童養護施設となり、今日にもこの養護事業が続けられていることは特筆に値いすることを記してむすびにかえたい。

注

- (1) 坂本忠次「津田白印（明導）の孤児救済事業－甘露育児

院を中心に－」『関西福祉大学研究紀要』第10号、2007年、並びに「津田白印（明導）先生の孤児救済事業のあしあと（顕彰シンポジウムの記録）」笠岡市22地域づくり塾・岡山龍谷高校、2008年。なお、本稿で検討する悲眼院の開設時の院長渡辺元一医師は当初甘露育児院の医療を担当していた。

- (2) 守屋茂『岡山県下における慈善救済史の研究』岡山県社会事業史刊行会、1958年、同『近代岡山県社会事業史』1960年、同『仏教社会事業の研究』包蔵館。なお、資料として守屋茂（岡山県立図書館寄託、^{とうこう}韜光文庫）があり、その中に『悲眼院十年史』ほかが残されている。なお、仏教の救済思想については、前述の守屋茂『仏教社会事業の研究』、吉田久一・長谷川匡俊『日本仏教福祉思想史』法蔵館、2001年、などを参照。
- (3) 津田白印の事跡に比べ、非眼院に関する一次資料は高橋真一氏が神戸にて執筆され、その時の資料が多分阪神大震災のさい焼失したものとみられる。本稿は残されたいくつかの資料と現明王院住職高橋昌文氏からの聞き取りなどによったことをお断りしておく。
- (4) 以下は、主に、高橋真一『麦の一穂を一高橋滋本の歩いた道一』（非売品）、1977年の付表年表によっている。この記録には、慈本の家族のことなども含め詳しく記されている。
- (5) 戦後現在の悲眼院の児童養護事業については、現住職高橋昌文悲眼院院長からの聞き取りをもとにしている。虚弱児や不登校の児童をあずかり、小中高はもとより短大、大学にも通学させている。
- (6) 高橋慈本『悲眼院十年史』1924年、2～4ページ。同『悲眼院十五年史』1929年、1～3ページ。
- (7) 高橋真一『麦の一穂を一高橋滋本の歩いた道一』1977年、45ページ。
- (8) 前掲、『悲眼院十年史』、3ページ。
- (9) 悲眼院案内「施設の概要」による。
- (10) 『悲眼院十年史』、6～8ページ。岡山県『農村に於ける救療施設－小田郡北川村悲眼院に就て－』1928年、4～5ページ。
- (11) 岡山県『農村に於ける救療施設－小田郡北川村悲眼院に就て－』1928年、4ページ。
- (12) 『悲眼院十年史』、9～11ページ。前掲、岡山県『農村に於ける救療施設』、6～8ページ。
- (13) 前掲、岡山県『農村に於ける救療施設』23ページ。なお、以下の記述も高橋真一、前掲書及び同上2書及び『悲眼院十五年史』によったことを付記する。

- (14) 前掲、岡山県『農村に於ける救療施設』36～39ページ。
(15) 高橋真一『麦の一穂を』63ページ。当時岡山県庁にいた
守屋茂への高橋慈本からの書簡（韜光文庫所蔵）による
と、次の資料に見る通り、院の経営の生々しい現実も分か
る。

高橋慈本から守屋宛書簡

…前略…悲眼院は、不遇にして困苦罷りあり、素より成績は、決して劣り居らずと覚え居り候も、浄財はなし、有志寄付は一厘もなし、他の私設事業同様、苦心の下に経営致し居り候に拘らず、部長も課長も一度も来視せず、宮内省の御奨励を如何に考え居るか少々の不満有之候。特に私設社会事業に補助の決議あり、大臣の指示もあり候も、県が更に考慮を払わないと云うのは言語道断と存居候。小生の信念は、去る18日大阪放送局より放送せし如く、社会事業は国家が試すべきが本義なり。故に諸官署の援助なき事業は、其必要を認めざるものに候故、何時でも閉鎖すべき筋合に候故、若し十月に於て県が更に顧みない時は、顧問（注、濟世顧問のこと）も辞し、小田郡済世会も解散し、同時に悲眼院も閉鎖し、県の態度に関する声明書を發表し、態度を明にする決心致し居候。素より、それ迄には一応、課長、部長、知事の明確なる言明を得る手続の上にて候。私設事業中には、数万の負債を負い苦しむものあり、実際私設事業は、生死の場合にして、悉く真剣のものにて候。弱き社会事業家の数年の苦闘に報ゆるる結果は、如此もの、御憐察願上候…後略。

（昭和2年）9月22日 高橋 慈本

参考文献

1. 高橋慈本『悲眼院十年史』1924年
2. 高橋慈本『悲眼院十五年史』1929年
3. 岡山県『農村に於ける救療施設—小田郡北川村悲眼院に就て—』1928年
4. 高橋真一『麦の一穂を—高橋慈本の歩いた道—』（非売品）、1977年
5. 走出薬師『持宝院の歴史と文化財』持宝院、平成6年

〔あとがき〕

本稿作成に当たり明王院住職、児童養護施設「悲眼院」理事長高橋昌文氏および関係者の皆さんにお世話になったことにお礼申し上げたい。



笠岡市持宝院境内にある旧眼科診療所に使用していた現存する建物（金澤健吾氏撮影）

